

山とスキー

第七十八號



札幌 山とスキーの會 發行

大正十二年七月廿七日第三種郵便物認可
昭和二年十二月廿八日印刷納本

昭和三年一月一日發行

(每月一回
一日發行)

◇すまりをて得を讀愛御の下殿宮父秩りよ號刊創は誌本◇

次目號八十七第

記 事

天候の智識と山岳に於ける災害

Prof. Dr. A. De Quervain

岡 田 實 譯

〔一〕

クリスチヤニア・スウイング

青 木 信 三

〔二〕

本道スキー地蝦夷語地名解

河 野 廣 道

〔三〕

ヘルヴェチア・ヒユツテの建設

山 崎 春 雄

〔四〕

寫 眞 版

ジヤンブ (札幌シヤンツエ)

吉 田 世 紀

奥 手 稻

大 谷 生

昭和三年一月發行



奥 手 稻

大 谷 生

天候の智識と山岳に於ける災害 (承前)

Prof. Dr. A. De Quervain.

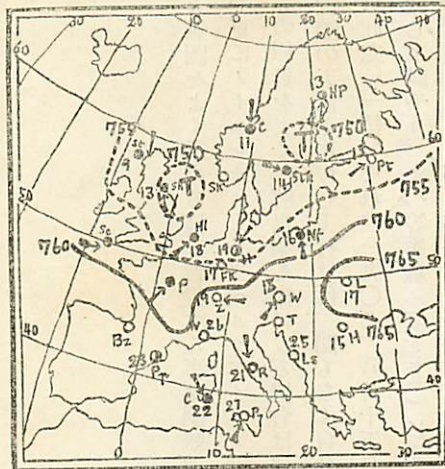
岡 · 田 實 譯

天氣圖をよく讀める様に習得する事は困難ではない。特に吾々チューリッヒに居る者には難事ではない。氣象臺の天氣圖や更にノイエンチューリッヘルツァイトング (Neuen Zürcher Zeitung) に載る小さな天氣圖は一般的に平易なもので、之等の報告をよく了解出来る様になる機會は決してない事ではない。之等の天氣圖を色々の報告と合せて規則正しく研究し實際の天候と比較して行けば、間もなく自分一人の眼丈でよく判讀し得る様になれる。

只此處に一例、それは一九〇七、八月十五日、前述のマッターホルンの慘事のあつた日 (引例第五) の天氣圖について研究して試やう。まづ等壓線 (Isobaren) によつて調べてみると、高氣壓の地方は通常好天氣を呈してゐるもので、之は前日は全中央ヨーロッパとフランスを蔽つてゐたがその後大陸の東方に逐ひやられてゐるのを見る。晴雨計の最低七五〇ミリは英國の北、やゝ離れてその威力を振つて居たが、今や北海にまで進みその結果南西の風と雨雲とが齎らされた。かかる遠方の低氣壓よりもつと吾々瑞西の天候にとつて重要なのは七六六ミリの等壓線がその南縁でフランスに亘つて晝く袋の形をした彎出である。何故かと云ふと、經驗によればこの低氣壓の等壓線のかゝる彎出は「暴しの袋」又は暴しの凹みと記されてゐる。暴しは尙かゝる天氣圖に表はれる等壓線の特別な形に依つて豫知されるのみでなく、又特別な雲の形

狀によつても豫測出来る。この事については後に研究する。とにかくこうした天氣の状態は山の旅行者に尤も注意して警告しなければならぬ所のものである。

然し又山に行く人達は、来るべき天候を豫測するのみでなく、昨日までは山では大雪があつたかどうか、上では主にどんな天氣が續いて居たかとかいふ今までの天氣の事もよく知つて居なければならぬ。引續いたその時までの天候が原因となつてゐるあのベルグリヒユツテとグリースバス(引例第二と第十一)



暴風雨の際の气压配置圖

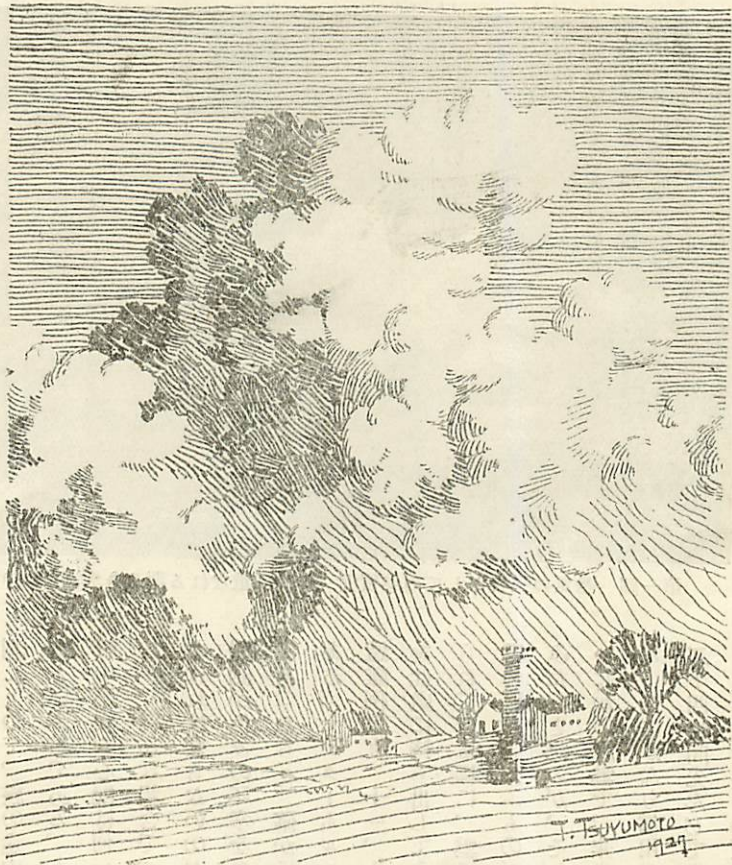
氣が如何に悪くなつて行くか、そしてそれが遂には如何に怖ろしい暴風に變るかを吾々は經驗した。こんな特別な場合は東に行くに従ひ地方により、非常に著るしく天候は悪化するものだといふ事を悟つた事であつた。然し之はあの俗に云ふフェーンの吹く時とは反對の現象を呈するもので、東瑞西は西瑞西と反對に大變恵まれ、同時に又アルペンの北側はフェーンの的に晴れるのに、南の谷々では雨が降るのである。で豫報を立てる人や、豫報を利用する者は、各自自分の立場を考



第一圖 暴風の豫告としての巻積雲（層狀に重なる明るき雲頭Cが特長）

へて、之等の事をよく了解してゐなければならぬ。

さて吾々は今度は第二の問題に到る。即吾々自身の天候観測によつて、旅の途中でも尙何か有効な事が測り得るだらうかといふ事である。ある少數即約三十パーセントに於ては旅行中不安や心配は何一つ存在しないといふ様な事になつてゐるが、何んな場合でも吾々は途中で天候の事を心に止めてゐなければならぬのだ。そして殆ど之等のすべての場合各自の観測が色々の不幸を免れた所の素因を適當に導き出したものであつたらう。確かに此の事は吾々の實例から云はれる事である。(マツターホルン不幸事例第五、ユングフラウの色々の遭難例第九、十一、十二)で實際に用ひて有効な色々の観測を此處に持ち出してみやう。第一に雲の觀察である。既に知られて居る様に、雲にはある定まつた典型的の意味を有する雲の形狀と云ふものがある。私はこゝに重要な一例を陳べてみたいと思ふが、それは中程度の高さにある、頭と塔とを載いたかの層雲で、非常に特長のある爲誰でもすぐ見覚えられる。之はかなり信用の出来る暴しの前兆で、暴しに十二乃至二十四時間先んじて出る。だから多くの場合安全な所に避難するか、計畫を變更するには尙充分の餘裕がある譯である。



第二圖 暴風突發前に於ける積層雲（雲頂の
周邊は尙明瞭にして形は圓頂狀）

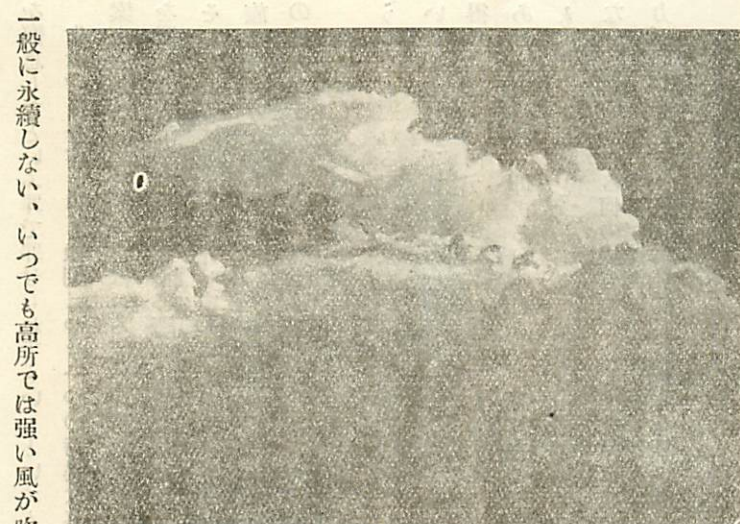
この雲所謂暴しの巻積雲
(Alto cumulus castellatus) は
挿圖に於て通常の形は第一圖
の如くであり、之によると明
るく見える怪しげな雲の頭は
暗い平な層の間隙を通して明
らかに見えてゐる。然し暴し
の巻積雲は主に二、三千米の
高さに浮いてゐるのに積層雲
(cumulus) の足は平均地上千
米を越えないといふ事を注意
すればこんな誤りは有り得な
い。そしてこの暴しの巻積雲
は普通早朝に出てやがて消え
去るものである。

れ、その頂は優にアルペンの高さを越える程でこの雲によつてもはや嵐は確實に襲來し、その猛威を振ふ事を覺る。然し雲の頭が尙圖の如く明瞭に圓まつて山の頂の様な格好をして一定の日の當つた所と蔭になつた所とを持つてゐる中は嵐は

その後初めて二圖に示す様な山の形をした積層雲が表は

まだ来るものではなく、その中頂上が平たくなつて一様に白く輝き混り合ひ、之が一方の側で鐵砧の形の様にそより立ち、遂に大低の場合雲の下の方が巻雲の様に白い縑になり初めると、先づ雷が鳴り出し、次にまづ最初の重たい水の塊りがポ

ツポツと落ち初めるのである。



第三圖 暴風突發時に於ける積層雲の頂（鐵砧狀）

その他の雲の形状を見て行く時には、上に述べた様に雲の形許りを注意するのでは充分とは云へないので、尙その方向と速度とを決定する事が重要である。例へば巻雲では之を調べる事によりその判定する意味が全然變つて来る。御存じの通りこの雲が北東から向いて來てゐる時は、直ちに永く快晴が保たれる事を意味し南東から南へ向つてゐる時は少くとも一日は通常晴れである事を意味する。南東の方向の時は既にそれは怪しいのであり、北西から來てゐる時は全く危険で雲が早く來れば來る程その勢は強いものである。これなどは誰でも決定出来る觀察であつて、天氣圖がなくても色々の事が分り得るのである。フェーンによつて起る雲の形も又特長のあるものである。その際どんな狀況にあるかを知るには、吾々は空の小さな部分を見る必要がある丈である。例へば出發前既に山ではフェーンの強い事を吾々によく教へてくれる立派なフェーンマウエルやフェーンフイツシユの形状は諸君にはよく分つてゐるべき筈である。フェーンの狀態にあつては天氣は

一般に永續しない、いつでも高所では強い風が吹いてゐるものである。この位の事を知らぬ者は當然知つて置くべき智識

を懈怠したといふ罪で罪せられてもいゝといふものだ。

尙山で自身作り得る豫測につき一つの特異な事がある。それは案内者の天候智識の信用の問題である。谷に住む住民や案内人に殆ど超人的と思はれる天候の智識が具はつてゐる事は一般によくある事である。私は然し之には餘り大きな價値を置くものでない事をこゝに斷つて置かねばならない。案内者といふものは氣象學者と同じく既に色々間違つて來てゐるそして彼等は深くも研究せずして、ある旅行を尙滞留させるや否やの決定の時に自分よがりの考へを非常に強く働かせる旅行者の方が確りした根據ある判斷を持つてゐる時にはそれもいゝ事であらう。そして彼が生え抜きの案内者と違つた物の見方をするならば、郷土保護に對しても何の犯罪ともならない。

尙も少し天候の智識を利用するのに他の方面から見て、云つておかなくてはならぬ事がある。それは吾々はいつても、どうしても遅れる事の出來ぬ不良な天候に對して、少くともそれに相當した注意を拂はねばならぬといふ事である。吾々はいつでも途中で面白くない豫報によつて妨げられないとは思つてはゐる。そして天氣を豫報する人もやはり間違はあり得る。こゝで何うにか計畫は變更されるだらう。がその他の點ではむしろ幸運を期待してもいゝだらう。多くの旅行者はある一定の時、即ある日曜日とか、稀に來る引續く祭日例へば五旬祭の如き時を利用しなければならぬ様に縛られてゐるものだ。それ故どうしてもこの事と山の不良な天候とは友達にならなくてはならないといふ事が一緒に考へられねばならない。此の事たる何の損失所でなくて非常に大きな利益である。山はかうした嵐の時には快晴な時とは全く異り、新たな力が鎖を放れて、往々非常に印象深いものである。丁度機械が唸つて居る時に、吾々が見て知つてゐる通り。

吾々は嵐に際して山がどう變化して行くかをよく知つて置かなくてはならぬ。澤などでも前には只小さな流れがさやかにあつた丈なのが「怖ろしい」ものになつてゐたり——それによくある事だがその割に知つてゐる人も少ないのだ——一週間前は何の事もなくブラ／＼と通つてしまつた綠草のスロープが、こうした何の危険もない傾斜に僅かの新雪が積つた許りに、すつかりツル／＼になつて、既に何人の犠牲者を呑んだ事か。更にこんな時には雪崩の危険を注意すべきは勿論

で、前には特に觸れなかつたが多くの事件の統計を見ると自分の精力を不適當な場所に浪費する様な冒險を明らかにやつてゐる者がある。そして結局目的は達せられず、迷ひ込み疲勞し遂には外で夜を過さなければならぬ様になる。——そして凍える。多くの凍死の場合を見て、疲勞した者の最後は如何に早くやつて来るかは、深く注意して置くべき事である。然しもしこんな場合その人達が外で夜を徹す爲に何等か心に用意がしてあつたなら——といふのはもしその人々が雪中で一夜を明さねばならぬ際には、どんな方法を取るべきかを前からよく考へて置いたなら、かうした困難の際でも大抵は、不幸な轉歸は避け得られるものと私は考へて居る。非常に簡單な雪の家や雪穴を掘る可能性はあるし、もしスキーやストックを持つて居たなら小さなキャンプを作る事も出来るだらう。(例へば所謂 *Bird-haven*) それから前から私が考へて居る事だが、四人か五人のグループで永く山を歩かうと思ふ時には小さな軽い天幕を携帶するのは骨の折れる事だらうか。二キロ位の過剩なら巧く脊負へるしそれを分け合つて脊負ふ事も出来る。之は非常に便利なもので、必要に應じて適當な所に滞在出来るし、公衆用のヒュツテで變に煩はされる必要もない。そしてヒュツテの滞在が屢々休息といふ事についてはお話にならない事に較べて、自分の天幕だの、簡單な一つのシュラーフザックの方がどんなに好ましいものかといふ事は、クラブのヒュツテに一夜を明す時誰にでも思ひ起される事であらう。

又相當の糧食補充がついて居る爲に、天氣の工合などはどうなつてもいゝといふ様な場合には、より合理的に多々益々辨ぜられる譯である。強くコンデンスした、凡ゆる生理的要求に充分適應するといふ食料なんかもあり、よく探險隊等に利用されるが、之があれば毎日御馳走はないにしても一週間位は立派に營養を取り續け得る。然しこんなものでは著しく体重を増すといふ事は望まれない。之は又救急食料としてヒュツテにも適當して居る。

尙天候の報告を各地に傳へる編成に於て何かもつと有効な事を旅行者達になし得るか否かについて考へて見ておかねばならない。之は事實を基としてみればよく肯定される問題である。吾々は旅行者がもし出發地で、何處か最後のホテルとか或は他の場所で氣象臺の報告を手に入れ得たならば、非常に利益のある事を見て來た。その豫報から何を作り出すかは

各自の任意ではあるのだが。又たとへ山の旅行者の要求に應ずる一般の天氣豫報は發表されなくても、裾野の人々の數多の要求に關係する豫報なりともあれば、それでも高山の天候の豫斷は與へられ得るだらうし、それは正午迄には、だからある一部の人にはその出發前に、どこの山の旅行者の出發地點でも揭示されてもいゝだらう。(之は既にある數ヶ所では實行されてゐる) 勿論中央氣象臺でもこうした提案の出る事は前から注意はしてゐたであらうが、一体この事業たる中々の難事であるのだ。吾々は氣象臺の暴風警報の際經驗によつて一つの平行線をフランスの或は北又は東の海岸に沿つて引く事が出来るが、同様に多くの事は豫測出来ない。やがて、當然利用すべき時を明白に告げん爲に怖ろしい嵐が猛然と襲來する。かゝる暴風の警報の怠慢不怠慢は、特にアルピニストが自動的にそれを信用する時には重要な責任を負ふもので、氣の小さい豫報者はこの責任を軽くする爲に、そしてその爲に又誤りに落ちるのであるが、屢々不必要に警戒し、むしろ及ばざるよりも過ぎたるが如くする。彼は例へば西から來る障害は正に怪しいと考へる。が之が瑞西に入ると大抵はそう悪く暴れる事はない。そしてこんな不用な警戒でも發表されると大抵のヒュツテには登頂を前にして色々のパーティーが滞在してしまふ。豫斷を利用した人は馬鹿を見、他の「鐵面皮の狸等」はドン／＼出かけて行き今度丈は幸運に恵まれる。然しこうした豫報も多くの場合、信用しておいていゝものである。

それで價值ある警報を今までより、より多く旅行者に傳達する事は、ある種の義務だといふ事が云はれてもよいとすれば、その提議は常に豫報を發する人からではなくて、登山者自身遂から出されなければならない。この意味で支部 (The) の理事は S. A. C. の中央理事の仲介の下に、こゝに云つた意味に於ける一つの計畫を立てたが、之によつて旅行者の天氣豫報の需要といふ事の爲に一つの特別な合同が行はれた。詳しい實行等に關しては下に記す後説に譲る。

吾々はこの研究の重要な結果として、出來得る限りの注意を顧慮するに於ては、天候の側から起される殆ど凡ての山の災害は避け得られるものだといふ事を發見した。さて之で以てあの限りない不安心配について、みんな云ひ盡されてしまつたのだらうか。然らず。吾々は山にあつては直ちに起り得る自然の偉力との戰の崇高にして偉大なる感情のあるものを

知つて居る。そして吾々は總ての場合家にある事が危険を避くる尤も正しい事だとは考へては居ない。然しこの戦といふものは、云ふ如く單に拳を固めてやる必要は少しもなく、少しの智識、ほんの賢い斷念及び、戦争の際の參謀地圖の如き天氣圖とが之に對する最良の武器なのである。

x

「天氣豫報傳達の編成」に對する補遺

この *Paradeur* の最初の出版以來、この方面に重要な新しい方面が拓けて、その實現は旅行者の異常な興味の中に、吾々アルペンクラブから離れて、この新版の出る頃には既に殆ど完成の域にまで達してゐる事だらう。でこゝに簡單乍ら一寸云つて居かなければならぬ事がある。

簡單な圖を描く爲にそして豫報の基礎として役立つてゐた國際的天氣豫報はつい少し前までは一日に只一度しか發表されなかつた。それは確に良い事ではあるが、吾々の斯くの如く變化の著るしい天候に於ては少し間が長すぎる。今や戦争に際し即軍隊や更に今日では民間の航空界の特別な要求の爲に、まづ、戦争に加入してゐる國は一日に三乃至四回その天氣豫報を報知し、天氣圖を發表する様になつた。こうなればかく不定な間斷ない天氣の變動を豫報や情報に依つて、多くの場合確實に研究する事が出来る様になつたのである。現在平和會議は之を完成せんと努力し、やがては我瑞西も之に加入する事となるであらう。この組織の條件を遵奉する爲に吾々は無線電信局を要求するものである。

吾々が先に述べた所の意味からして、この新しい改良を旅行者達がより有益なものとする事は容易な事である。

この問題を次の如く考へて見る。一日三回、ある定つた時刻に（例へば午前十一時午後五時及び九時）瑞西の無電局（チユーリツヒ）は全瑞西中で簡單な受信機で受信される様なエネルギーを以て無線の天候報告と豫報とを放送する。又クラブのヒユツテや、少くとも凡ての團體によつて管理されてゐるヒユツテではかゝる受信機を供へて置く。電報は誰にも了解される様に非常に簡單な幾度も繰返される符號例へば一から百までの數で作つたもので知らされる。この機械に添付さ

れた符號帳はこの數の意味をすぐ解いてくれるし、モールズの記號による詳細な揭示はこの無電を尙完全にするであらう。かうすれば旅行者は平地の住民と全く同様に、その走行中に約六時間毎に豫報を手に入れ、襲來する惡天候は局部的なものか、通過的のものか、又は普通の性質のものか、又旅行者は特別な天候に依る障害を充分期待すべきや否やの判断を決定する事が出来る様になるであらう。

これ以前に論じた登山者への天候報知の問題は理想的に限なく解けた譯である。(又アルペンの救助事務には無線電信の利用は歴々確實迅速な一方の役目を務むるものである。)

吾々はこの設備はその實現に嚴肅な障害を受けるとは思へないが、永く逡巡する事なく實施の域に達せん事を望むものである。

譯者の怠慢から續篇がこんなに遅れた事を深く御詫び致します。内容が随分古
いし、重に瑞西やアルペンの、狀況や人を基として書かれてあるので、多少讀み
にくい所もある様です。他日嶄新な内容に改める機会を得ん事をこゝに再び期し
ておきたいと思ひます。(譯者)

クリスチャニヤ・スウイング

青 木 信 三

大正十二年に札幌で「スキーの驚異」 Wunder der Schneeschuhs. と云ふ映畫が公開されました。この映畫によつて初めて外國の一流のスキー家が自由に滑る様を目のあたり見せられて私は其技術の巧妙さに驚ろかされました。今年再び「スキーの驚異」を見まして益々其老練さに驚ろきま

した。この映畫のスキー技術の巧妙さは主にスキー家達の熟練によるものと考へられますけれども彼らの用ひて居る種々のテクニクも必ず良きものに違ひないと考へて私は非常に知りたく思ひました。で其映畫のテクニクについて書いて居る Wunder der Schneeschuhs. と云ふ本によつてクリスチャニヤの方法を知りたいと思つて拙い語學の力で拾ひ讀みし、又それを實地にやつて見ましたがまだ良く

呑み込む事が出来ません。然し私はこの解説は間違ひなく非常に良くクリスチャニヤスウイングを説明して居ると考へましてクリスチャニヤスウイングを練習する人の御參考迄に受け賣りに書き誌るさうと思ひます。

クリスチャニヤスウイングを申上げる前に一言申上げて置きたいのは直滑降の事であります。「スキーの驚異」を見られた方はすでに知つて居られるでせうが彼等は非常に低く蹲んだ姿勢所謂ホックステルング(Hockstellung)で直滑降をします。

この直滑降の可否については多くの議論がありますが、然しこゝでは彼等は是が從來の直立のものより非常に安全に滑降し得るして非常に急な斜面の直滑降に於て又傾斜の

變化の多い斜面に於ては是非ともホツクステルングが必要
 であると云つて居ると申し上げるに止めます。直滑降は多
 くのスキーテクニックの根本をなすものですから之が變

クリスチャニヤと其方法に於て又考へ方に於て大分異なつ
 た點を持つて居ります。例へば従來は兩スキーの先端をオ
 ーブンスル事によつてそれからエツヂングによつて廻りボ



- Fig 1. ダウンヒルクリスチャニアの場合ステムクリス
 チャニアよりシエーレンクリスチャニアに移る
 瞬間。
 Fig 2. 固い雪の上に於ける良く腰の折られたクリス
 チャニア。
 Fig 3. 腰が山側に出る様に折られて居ない悪いクリ
 スチャニア。
 Fig 4. 代表的なシエーレンクリスチャニア。
 Fig 5. 始に少しステムされたシエーレンクリスチャ
 ニア。

れば勢ひ他のスキーテクニックも多少變つて來なくてはな
 りません、ですからこゝに述べるクリスチャニヤは従來の

デースウイングは補助の役をしましたが、このクリスチャ
 ニアの解説に於ては兩スキーから体重を抜く事と足の力で

スキーを廻轉さす事によつて廻りオープン、ステム、等は補助の役をつとめるものだと言つて居ります。

然し之等の異なりは又直滑降以外の多くの立場からも由來して居るでせう。兎に角彼等の直滑降はホツクステルングでなされると云ふ事を注意していただきたいのです。

ゲリツセネクリスチャニヤ

Der Geisene Kristiania.

之は非常に急に止るクリスチャニヤで其動作は後に述べるライネクリスチャニヤと殆んど同じであります。ライネクリスチャニヤより動作が非常に早く又力強いのです。つまりライネクリスチャニヤとドレーシユアルングとの間のものであると云ふ事が出來ます。ホツクステルングより急に立上りその爲に兩スキーから体重の荷重が抜ける其瞬間足の力でスキーを廻すのです。この立上りはドレーシユアルングよりも弱くライネクリスチャニヤより力強い程度のものであります。立上りはホツクシユテルングが低い程力強くないし得るものです。

身体は最初一寸の間、前に傾倒され廻轉の開始と同時に

廻轉の内側にそれと同時にやゝ後方に傾倒されるのです。

スキーは常に平行で平等に体重をのせます。

然し兩スキーから良く体重が抜かれなかつた場合又は斜面がゆるいとスキーが平行でなくなりませんが平行でなくては悪いと云ふ事はありません。良く体重が兩スキーから抜かれると非常に良くこのスウィングを行ふ事が出來ます。そこでスキーが廻されたならば急に止りますから兩足でしつかりと頑張るのです、もし体重が一方に偏しますと立つ可能性が非常に少なくなります。

でこの時スキーは速かに山側のエツヂを使用します、身体はこの急なストップの爲に谷の方へ投げ出され様としますから強く山側に傾倒されなければなりません。

特に注意を要するのはスキーが廻轉して居る間スキーは常に平ら（エツヂを用ひない即ち雪面に平行）に保たなければならぬと云ふ事です。

これだけの説明では不充分で良く理解していただけないでせうが要するに次のライネクリスチャニヤと同じ動作をより早く力強くするに過ぎないのでから次のライネクリスチャニヤを讀めば理解していただけると思ひます。

ライネクリスチャニヤ

Der Reine Kristiania.

このクリスチャニヤは兩足をもつて行ふ即兩足平等に体
を乗せて行ふものでスキーは常に平行に保たれて居りま
す。このクリスチャニヤは種々のクリスチャニヤの基本の
ものと云ひ得るものであります。

説明の便宜上右廻りクリスチャニヤとします。

このクリスチャニヤを五つの階段に別ちます。

(一) 兩スキーの荷重を抜くためにホツクステルングから
立上る。其立上りには次の事が加へられる。身体を右に捻
りながらそして身体が前に傾倒する様に立上る。

この立上りは雪とスキーの摩擦が大きいほど、即ち、雪
が深い程、スピードが遅い程、強くなければならない。反
對に摩擦が少ない即ち雪が淺く滑かな程、スピードが速い
程少なく立上れば良い。

前に傾倒する事は、斜面の傾斜が急な程、スウイングを
短かくし様とする程強くなければならない。

最初から体重を後方にかけてスキーのエツヂを使用する

方法は實地に於て見られ又本にも書いてあるが良くない方
法である。

この身体の立上りと前への傾倒がクリスチャニヤスウイ
ングの第一の秘訣である。

(二) 身体の立上りと前傾倒によつてスキーから体重が抜
かれたならば足の力でスキーを捻廻す。この時身体はスキ
ーより餘計に右に廻す。

兩スキーは出来るだけ雪面に對して平に保ち、出来るだ
け平行に保つ。右足を靴の長さほど前に出す。

以上の諸動作は(一)の次の一瞬間になされるものです。こ
の(二)ではクリスチャニヤスウイングの間で最も多く身体が
立上つた状態にあります。

スキーが廻轉して居る間兩スキーを雪面に對して平に保
つ事即ちエツヂを使用しない事がクリスチャニヤスウイン
グの第二の秘訣である。

(三) スキーの荷重が抜かれてから再び強くスキーに体重
がかゝりスキーが雪の中に押し込まれる迄足の力を以てス
キーを廻し、この際強く山側に傾倒されそして腰を山側に
出す様に折られた身体のボテスウイングによつて廻轉を助

ける。

身体は(一)に於て強く前に傾倒されたが(三)に於てほとんど傾倒はもとへもどされる。

腰を山側に出す様に折る事がクリスチャニヤスウイングの第三の秘訣である。

(四) 平に保たれた両スキーの山側のエツヂを徐々に使用する。後に残つた左スキーは後方に押す。身体を押し下げ腰を折り且つ山側に傾倒する。

それと同時に体重はやゝ後方に移す、即、足趾から踵に体重を移し最後迄スキーのテールを押し続ける様にする。

最初に浮かした体重が再び沈み初めたならば最後迄身体を下に押し続ける、之がクリスチャニヤスウイングの第四の秘訣である。

(五) 再び立上る。

以上簡單ではありますがライネクリスチャニヤの五の階段を述べました。なほ身体の運動を明かにする爲に次の三つの項を書きそへます。

之は身体の運動を、前後、左右、上下に分つて誌したものです。

一、前後の方向に於ける運動

初めに前に傾倒され次に反對にやゝ後に傾き、結局直角に廻る。

二、左右の方向に於ける運動

初め廻轉の内側に傾倒され、後直角に廻る。

三、上下の方向に於ける運動

初めに立上る。次に下に押し沈め、最後に再び立上る。

シエーレンクリスチャニヤ

Der Scheren Kristiania.

之は廻轉の内側の足によつてなす、即廻轉の内側のスキーにより多く体重を乗せて行ふクリスチャニヤです、このクリスチャニヤでは両スキーは鉞形 (Scheren Stellung) 即スキーの先端をオープンした状態で行ふものでありますが其オープンした前スキーで雪を掻きそしてエツヂングする事によつて廻るクリスチャニヤとは全然別のものである事を注意していただきたいのです。

シエーレンクリスチャニヤは多くの場合アツピルクリスチャニヤに用ひられます。

シエールンクリスチャニヤは根本に於ては少しも新しくはなく、本質に於てライネクリスチャニヤの(三)以後の動作をするものであります。

説明の便宜上右廻りの場合とします。滑降中体重を前に傾倒しスキーのテール(こゝでは足から後全部を意味します)を浮かし、足から前の部に重みを乗せる様にする。

それと同時に内側のスキー即右スキーに左スキーより多く体重を移す。そして両スキーを足の力で廻轉する。

さうすると浮かされたスキーのテールには多く荷重されたスキーの前部よりも早く谷の方へ降る。即、スキーは廻轉されるのです。其際スキーは出来るだけ雪面に平に保ちます。

で右スキーに左スキーより多く体重を移す事によつて右スキーの前部は左スキーのそれより多く荷重を加へられ、右スキーのテールは左スキーのテールより多く荷重を抜かれますから右スキーは左スキーより早く廻轉されます、此所に於て両スキーは所謂シエールンクステルング (Scherenstellung, 鉸形) になります、即スキーの先はオープンされるのです。身体は強く山側に傾倒される事によつて益々早

く廻り得るものであります。で荷重を抜かれた外側のスキー即左スキーは右スキーの後から随伴して廻るのです、ですから外スキーよりも内スキーに力を入れるこの様な方法では殆んど自動的にシエールンクステルングになるのです。

廻轉の内側のスキーに外側よりも餘計体重を乗せる程シエールンクステルングは表はれて来る。そして両スキーに平等に近く体重を乗せる程両スキーの開きは少なくなつて遂には平行となつてライネクリスチャニヤとなつて来るのです。更に体重を外スキーに多く移して行けばステムステルング (Stemmstellung, 兩スキーのテールを開いた形) になります。

なほシエールンクリスチャニヤをよく理解していただくために次に其動作を列挙します。

右廻りの場合

高い姿勢のホックステルングから——右スキーを少し前に出す——立上りそして身体を前に傾倒する——両スキーは雪面に對して平に保ち右に廻す——腰を山側に出す様に折る——スキーの廻轉中に身体は後方にそして山側に傾倒する——廻轉中は身体を下に押し續ける——終りに両スキ



シヤンナ (札幌シヤンナエ)

一の山側のエッジを用ひ踵で壓しつける様にして止る。このスウィングの秘訣はスウィング中、スキーを雪面に平に保つ事、腰を山の方に折る事、身体を山側に且やゝ後方に傾倒する事の三つであります。

ステム クリスチャニヤ

Der Stamm Kristiania

このクリスチャニヤは廻轉外側の足による即外側のスキーに体重を多く乗せて廻る方法です。

ステムクリスチャニヤは、STEMMINGとスウィングとの複合であります。

ステムボーゲンに於て常に早くより速かに廻らうとする時には廻轉の内側のスキーは非常に早く外側のスキーに對して前に滑り進められ体重は急に外側スキーから内側スキーに移り廻轉は非常になつて遂には一つのスウィングになつて來ます、之が即ステムクリスチャニヤであります。

ステムクリスチャニヤは多くダウンヒルの場合用ひられます。便宜上右廻りの場合とします。

ホックステルングから立上ると同時に左スキーを足の力で外方且やゝ前方に擴げます。この時スキーは雪面に對して平でなければいけない即エッジを用ひてはならない。次に体重は急にこの左スキーの上に乗せられ左足の膝を曲げる。次に荷重のかゝつて居ない内側の右スキーを隨伴させ前に滑り出させステムスキー(左スキー)に平行に迄引きつけます、其際兩スキーは平に保ち踵をスキーからあけてはならない。即ち足の裏全体でしつかりとスキーの上を壓します。次に体重を前に出された右スキーの上に移します。初めに立上つた身体はこの全スウィングの間常に深く雪の中に捻り込む様な氣持で下に壓しつけ決して浮かしてはなりません。最後にこの下に壓せられた身体を起してスウィングは終ります。

このステムする事はスウィングが早く行なはれる場合には目で見ることが困難でことに方向變換の角度が小さいほど兩スキーは益々平行なまゝで廻轉して其際のステムの状態は高速度寫真で撮して見て初めてわかるほどであります。

クリスチャニヤスウィング

今迄述べて来たクリスチャニヤスウイングは次の三つの種類であります。即

一、兩足平均に荷重するクリスチャニヤ(ライネクリスチャニヤ)

二、廻轉の内側の足に荷重するクリスチャニヤ(シエーレンクリスチャニヤ)

三、廻轉の外側の足に荷重するクリスチャニヤ(ステムクリスチャニヤ)

であります之等の三つのスウイングを綜括すると一種のクリスチャニヤが出来て來ます。

即ち廻轉の外側のスキーによつてステムする第一段内側のスキーの隨伴に依つて兩スキーが同時に廻轉する第二段最後に内側のスキーに荷重する第三段をもつクリスチャニヤが出来てくる、換言すれば第一段がステムクリスチャニヤ第二段がライネクリスチャニヤ、第三段がシエーレンクリスチャニヤと言ひます。

雪とスキーとの間の摩擦が多い場合即ちダウンヒルであればある程、雪が深ければ深い程、速度がをそければ遅い

程益々第一段のステムを強くしなければならぬ。其反對

の場合、即ち雪とスキーとの間の摩擦が少い程、アプヒルであればある程、雪が深く滑らかな程、速度が早い程益々

テムは不必要となつてくる、そして益々早く最後のシエーレンに依つてのみスウイング出来る様になります。そして

斯様な綜括的クリスチャニヤの方法は次の六つの段階に依つて理解し得ます、

右廻りダウンヒルの場合とします。

一、スキーの荷重を抜くために立上る、その時身体は前に傾倒する、左スキーを雪面に對して平に保ち乍ら廻轉の外方に開く。

二、体重を開けられた左のスキーの上に急にのせて足の力でステムする、その際右のスキーの荷重を抜いて平に保ち乍ら左スキーに引付ける。

三、右スキーは速かに左のステムスキーに並行にする、そして兩スキー平均に体重を載せて廻はす、その並行な兩スキーは出来るだけ雪面に平に保つ。

四、右足に体重を移し乍ら体を押し下ける、その際右スキーは左スキーよりも稍々早く廻轉する即ちシエーレンシ

ユテルングになる。身体は内側に傾倒され兩スキーよりも少しよけいに右に廻はされる。

五、身体を強く下に押し内側に傾倒する、同時に身体の前への傾倒を後ろへの傾倒に變ずる、右スキーから体重を兩スキーに平均に置く、そして今迄雪面に平に保つた兩スキーは山側のエッジを使用する、体重を靴の踵に移しスキーのテールを押しつける様にする。

六、スウイングが終つて立上がる。

是等のクリスチャニヤの經過に依つてステムすることボデイスウイングすること、シエーレンすることは補助の役をつとめスキーを廻轉する主な力は足の力であることがわかる、ステムクリスチャニヤは廻轉の外側のスキーを前に出すことによつて始められ、ライネクリスチャニヤは兩スキーを揃へ或は一方のスキーを前に出すことによつて始められ、シエーレンクリスチャニヤは内側のスキーを前に進めることに依つて始められる。

前記のクリスチャニヤに於ける荷重の變化を特に再記すれば兩足——内側の足(短い間)——外側の足(より長く)——兩足(短い間)——内側の足(より長く)——兩足、之

等の變化が早く行はるれば行はるゝ程スキーは並行のまゝ廻轉する。

以上不十分ではありますが一通りクリスチャニヤについて述べ終つたつもりです。原稿が切の直前に急いで書きましたのでスキーテクニクの上手な方々の御意見を聞く事が出来なかつたのを残念に思ひます、尙私はこれらのスウイングを充分會得して居りません故、もしこの説明中に誤りがありましたら私の無智の致す所と御容赦下さいまして御教へ下さいませ御願ひ致します。

本道スキー地蝦夷語地名解

河野廣道

山口氏が本誌七月號以下數回に亘つて「川名のアイヌ語解」なる論説を發表せられて居るから私は本文に於ては、唯最も有名なるスキー地、スキー地に關係ある地名及び有名なる山岳名を列擧するに止めた。本來のアイヌ名でなくても後に和人が附近のアイヌ語の地名、川名等に因んで命名したのも便宜上同等に取扱つて置いた。

一、札幌——小樽附近

註(一)内はアイヌ名なり。

札幌(サツボロ) 豊平川の舊名サツボロベツに由來す。

サツ 乾燥せる、ボロ 大なる、ベツ 川。サツボロを「

廣大なる大陸の義」と譯するは誤なり。

圓山(モイワ) モ 小、イワ 丘、即ち小さき丘の義

藻岩山(インガルシユベ) インガル 見る。即ち眺望

よき處の義。アイヌは現在の圓山をモイワ(前出)と稱し

現在の藻岩をインガルシユベと呼んで居たものが、後に和

人が誤つて、インガルシユベをモイワと呼び、本來のモイワを圓山と稱する様になつたのである。

琴似(コツネイ) コツネ 低き、イ 場所を示す、即ち低き處の意、

輕川(カシガハ)

此の名稱の起源は疑問であるが、永田方正氏は和

名の涸川の訛なりと云ひ、磯部精一氏はアイヌ語のアルベ

ツト(平坦ならぬ川)より轉化せるものなりと云ふ。

手稻山(テイネ) 山麓の地名手稻に由來す。テイネはテイネイに

て、テイネ 濕れる、イ 場所、即ち濕地を意味す。

奥手稻 手稻参照。

札幌岳(サツボロスプリ) サツボロボツ(前出) 上流の山の義。ヌブリ山。

花畔(バナウングルヤソツケ) バナ川下、ウン川、の、グル人、ヤ網、ソツケ張る場所、即ち川下の人
が網を張る場所の義。

小樽(オタナイ) オタ砂、ナイ川、即ち現在のオタルナイ川は舊名オタナイであるが此が轉化して地名小樽となつたのである。

張碓岳(ハルウシ) に由來す。ハル食物、ウシ灣、即ち食物多き灣の義。

朝里岳(アサリイ) に由來す。アサリ上を向きて開きたる、イ處、即ち谷間の地に附したる名稱である。

余市岳(ヨイチ) 地名余市に由來す。ヨイチはイオチの訛にて、イオチは蛇多き處の義である。

二、青山温泉附近

ニセコアン 青山温泉に合宿した事のある北大スキー部の人々に懐しい思出を與へるニセコアンスロープなる名

稱はニセコアンなる地名より命名したものである。ニセコアンはニセコアンベツ川の流域一般を稱し、ニセイ絶壁コ中、アンある、ベツ川、即ち絶壁の中にある川の意である。

ニセコアンヌブリ 前出ニセコアン参照。

硫黄岳(イワウヌブリ) イワウ硫黄、ヌブリ山。

岩内岳 地名岩内に由來す。岩内はイヤウナイ即ち熊の肉を乾す澤の義とも、ウエオナイ即ち輕石多き川の義ともイワウナイ即ち硫黄の川の義とも云ふ。

三、羊蹄山——有珠岳方面

羊蹄山(マチネシリ) 蝦夷富士(マチネシリ) 又はマツカリヌブリ

マチネシリは雌岳の義にてマチネ雌、シリ陸の意である。又マツカリヌブリは川名マツカリベツに由來し、マツカリ山の後を廻る、ベツ川の義である。

尻別岳(ピンネシリ) ピンネ雄、シリ陸、即ち雄丘の義。前出マチネシリに對して呼んだ稱號である。本道には尙多數のマチネシリ、ピンネシリなる山名があるが何れも此と同義である。大なる山を雌に例へ、小なる山を雄に例へてあるのが面白い。

昆布岳 (コンボスブリ) コンボ 昆布、ヌブリ 山。
昔大海溝の時に此處まで昆布が流れて来た故にかく名付けたのであると云ふ。

洞爺 (トウヤ) トウ 湖、ヤ 丘、即ち湖の側なる丘の義。

有珠岳 ウスダク 山麓の地名有珠に由来す。ウス 灣、即ち有珠は灣に臨む故に命名せられたのである。

幌別岳 幌の川名ボロベツに由来す。ボロ 大なる、ベツ 川、即ち大なる川の意。

四、樽前—惠庭嶽方面

苫小牧 (トウマコマナイ) トウ 湖、マコマ 後、ナイ 川、即ち湖の後の川。同様に札幌附近のマコマナイなる地名も後の川の義である。

惠庭岳 (エエンイワ) エエン 鋭き、イワ 山、鋭き岩が多数にあるより名付けたるもの。エニハはエエンイワを早口に發音せるものである。

不風死嶽 (フツブシヌブリ) フツブ ト 松、ウシ 多く存する、ヌブリ 山、ト 松の多く存する山の義。

樽前山 言語不明なるも磯部氏に依れば、タルオマイで

あつて、掘り上げられたる處の意味で、噴火して土地が隆起せるより命名せられたものであると云ふ。

白老岳 (シラウオイヌブリ) 地名白老 (シラウオイ)

に由来す。シラウオイはシラウ 蛇、オ 多き、イ 處、即ち蛇多き處の稱である。白老とは有名な現存アイヌ部落白老村 (シラウオイコタン) のことである。コタンは村

又は處の義。
支笏 (シコツ) シ 大なる、コツ 谷。

紋別岳 川名モンベツ川に由来す。モン 靜かに流れる

又は漂ふ、ベツ 川。紋別川の上流にある故名付けたのである。

五、暑寒別岳方面

暑寒別岳 川名暑寒別に由来す。シヨカンベツはソウカンベツであつて、ソー 瀧、カン なす、ベツ 川、即ち瀧をなす川の意。

大雪—石狩—十勝—夕張岳方面

石狩岳 石狩川上流にある故後に命名せるも、石狩川はイシカリベツにて、イシカリ 廻轉する、ベツ 川、即ち廻り曲る川の義。石狩岳なる名は現在の大雪山に與へられ

た最初の和名であつたのが後に石狩川上流の山に移されたものらしい。

大雪山ダイセツ（ヌタツブカムシユベ）ヌタツブ川川の彎曲せる個處の内部、即ち石狩川上流が彎曲して廻る故に名付けたものであらう。又頰山の意と譯し、山頂がはけて居る爲に名付けたものであるとも云ふ。

ニセイカムシユベ ニセイニセイ險崖、即ち險崖なる山の義
層雲別温泉 ソーソウ瀧、ウンウンの、ベツベツ川。

ユニ石狩岳 石狩岳にユニなる語を冠したるもの。ユニ温泉、ウニウニある場所の意。

トムラウシ トムトム耀く又は花、ララ草の葉、ウシウシ多き處、草花の多き處の義。

オブタテシケ 檜のすべる山の義なりと。オブオブ槍。

トカチトカチ 十勝岳 十勝川上流にある故に名付く。トカチはツカツブチの訛にて幽靈を意味し、十勝アイヌの強暴を惡みて呼べる語なりと云ふ。

ニベニベツツ岳 河名ニベツツ川に由來す。ニベニベ木の汁、ソソ失ふ事。

音更岳オトシゲ オトブケ川の上流にあるより名付けしもの。オ

トブトブ髮の毛、ケケ場所、毛髮を生ずる所の義なりと云ふ
夕張岳ユウバウダケ 山麓の地名夕張に由來す。夕張はユウバロであつて、ユウユウ温泉、バロバロ口、温泉の口の義。



ヘルヴェチアヒユツテの建設

山 崎 春 雄

ヘルヴェチアヒユツテを以て我々は札幌附近に二つの理想的のスキーヒユツテを持つこととなつた。手稻山腹の姉に比すれば新ヒユツテは如何にも可愛らしい、僅かに十二

人の寢所しか備へてゐない小さな小屋である。しかし乍ら彼女はその使命を矢張り健氣に果すことであらう。實にこの小屋に依つて我々には小樽内川流域の山々とその針葉樹林の美をはじめて心ゆく迄味ふことが出来る様になつたのである。

ヒユツテの位置は錢函圖幅の殆ど中心、股下山の北を流るゝ澤の北岸に在る。七八七、九米の三角點から東南に派出する^尾風根に於て六〇〇米と五六〇米との間にある小さな瘡が丁度ヒユツテの北に當つて居る。尙この一帯の地は白

樺の純林で夏も冬もその明快な林内の美しさは奥手稻方面では他に類がなく、暗夜にも吹雪の時にも場所の認識を至極容易にしてくれるであらう。

手稻の小屋と同じくこのヒユツテも瑞西の建築家マックス・ヒンデル君の設計監督の下に建てられた瑞西風のブロックヒユツテである。たゞ今度のヒユツテはヒンデル君と同國のドクトルグブラー君とをその建築主として居る。兩君が我々の爲めに、又日本のアルビニスムスの爲めに瑞西クルブヒユツテの形と精神とを傳へんが爲めに建てられたのである。ヘルヴェチア（瑞西を象徴する女神）の名稱は兩君が千里望郷の情を遣るが爲に命名せられたのであるけれども我々はまたこれを以て永久にこの兩君を記念する

よすがとなすであらう。

グブラー君は現に札幌に居ることであつて同君に對し感謝の意を公にする機會は未だ多くあることであらう。反之にヒンデル君は昨年十月に札幌を去つて横濱に移住された。

同君の所謂故郷への第一歩を踏出されたのであつて、ヘルヴェチアヒュツテは同君が北海道に残した最後の作品となつた次第である。歐洲でも一流の建築家として識られ、日本でも澤山の大建築を作つた同君が小さな丸木小屋の一つを建てることは我々が小さな木箱一つ作るよりも無難なことであつたらう。然も我々はそこに同君の山の自然に對する思慕の情の底知れぬ深さと盡きぬ熱とを見ることが出来た。ヒンデル君はウィーンの大銀行を建て、サンモリーツツの大ホテルを建て、函館のトラピスト修道院、札幌のフランチスカールネルの修道院、東京の上智大學、日本全國の舊教の大建築を一人で建てんとして居る。ヒンデル君の足跡を印する所に魔術の如くに、その國、その町の眞の文化の宮殿が出来て行く、しかもヒンデル君は王宮を建てたよりも一ヘルヴェチアヒュツテの建設が自分には深い喜びであつたと云つて居る。ヘルヴェチアヒュツテはヒンデル

君の心血を注いだ「建築」のうちで恐らく同君が第一に指を屈するものではないかと自分は思ふのである。

札幌北十一條のヒンデル君の氣持のよい居間で、我々——ヒンデル夫妻、グブラー君——は楽しい會談の幾時かを過した。チロールや瑞西の山の話、北海道や内地の山の話は必ず會話の中心をなした。その間にヒュツテの計劃が芽ざしたのであつた。又自分がこの際、小屋の成立ちを記述するとせばヒンデル夫人の隠れた功勞をも感謝しなければならぬのである。夫人もチロールの山の空氣を吸つて育つた人でその快よき理解が如何に計劃の實行を助けたかを自分は知つて居る。

昨年二月に兩君よりいよくヒュツテ建設を實行したきこと、その實際的方面を自分に擔當せよとの依頼があつた。自分は北大並びに日本の山へ志ざすスキーファーレルの名に於て快よくそれを承知した。

計劃が具體的になつてからの食卓會議は中々活潑なものであつた。設計、場所、其他充分に考慮されたことは云ふまでもない。帝室林野支局との交渉は自分が専らその衝に當り、幸に鹽澤支局長及び沖野技師の厚意的了解を得るこ

とが出来たのである。北海道の御料林内にヒュツテを建てたのは最初の事であるが、林野局でも我々の趣旨を認め小屋敷地の貸下と用材の拂下とを自分の名儀で許可を與へらるゝことゝなつたのである。

最初選んだ小屋の位置は今の地點より更に上流一軒以上に溯つた第二の二股附近であつた。この附近は白樺林は既に盡きて美事な針葉樹が散在し天然の公園風景をなして居る。この地方の玉坐たる余市岳に接近しヒュツテの位置として先づ申分なかつた。

小屋の用材は設計に依れば六寸乃至七寸丸太延長三千二百尺、立木の數にして百本乃至それ以上その他柁材としてトドマツの一尺五寸以上のもので二本を要する見込であつた。然るに沖野技師は流石に自分の山だけに我々の選定したる林班にてこれだけの材を出せるかを始めから懸念して居られた。其點も我々は一應願慮した積りであつたので、その檢分に自分は三月二十六、七日に出かけた。錢函夏道の雪崩場所は數日前に物凄い大雪崩を押し出したあとであつた。澤はまだ到る所渡ることが出来た。其後、植田君、伊藤君其他を煩はして用材蓄積の有様を見、四月二十四日にグブ

ラー君が出掛けた。澤はその時には既に渡れなくなつて居た。同君もホルツはゲヌーグだとの「印象」を以て歸つて来た。その結果ヒュツテの位置は計劃通りとし、五月下旬グブラー君宅にスキー部山岳部主任及び重なる部員、ヒンデル君及び自分が集つて、ヒュツテの計劃を發表し、學生の助力を依頼した。其間、林野局よりの公の指令が漸く下つたので五月十八日より二十二日までの間にグブラー君が先づ西川、渡邊、貝沼君等と先發して本流の架橋をなし二十一日にヒンデル君を指揮者とし林野局の山田氏、山岳部主任伊藤君其他の一隊が登山していよいよ立木の調査をなすことゝなつた。残念にもこの最初の企ては失敗に終つた要するに豫定の地點附近には我々の所要の若い針葉樹が不足なのであつた。御料林の施業方針は四十年を一期として一區域の擇伐をなすのとて若木は出来る限り伐採が制限せられ、従つて非常なる廣汎の區域に亘つてゝなければ我々の所要の數量が包含されぬことになつて居るのであつた。ヒンデル君は此の日始めて奥手稻に行つたのであるが、最初の地點を拋棄せねばならぬことと成つた時に直ちに白樺の小屋を提議したのださうである。(自分は此の行には

同伴しなかつた) S A C の會員なるグブラー君に取つてはしかしヒユツテとタンネの森は切れば血の出る様な密接な結合であつたから、即坐に反對してしまつたので一行は空しく漠然たる前途の不安を抱いて下山して來てしまつた。生粹の端西ツ子ならぬ我々もあの地點を見捨てるのは實に残念であつた。しかしこれでヒユツテの計劃に大きな一頓挫を生じ、折角のインスピレーションも少々氣抜けがしたことは遺憾ながら事實であつた。

我々は更に第二の地點を選ぶために幾度も凝議したけれども白樺を用ゐぬとすれば外に適當の地點がどうも見付からなかつた。グブラー君は最初は白樺林に小屋を建てることはどうも賛成でなかつた。誰でも初戀の人が黒かつたら一生ブロンドのお嫁は貰はないだらうと自分はヒンデル夫人に云つて笑つたこともあつた。然し乍ら計劃を實行するとせば白樺を取るより外に手段なきことが明になつたのでグブラー君も遂に同意し、五月二十九日に自分は植田君と大工を同伴して白樺林中に敷地の選定と用材の模様を檢分に出かけた。そして現今のヒユツテの位置を決定し、笹刈りをなして歸つて來た。越えて七月八、九の兩日、再び登山、

林野局の小柳氏を煩はして用材の調査をなした。同時に齋藤造材部の人々も今年の小屋掛け材の調査をすることになつて居るので野月氏始め造材の人々も我々の用材調査を一所に手傳つて呉れた。柁材として一尺五寸徑のトドマツ二本、薪材四十本、建築用材として六寸より八寸までの白樺百四十一本に極印を打ち了つた。

積雪期に白樺林を通つた時の印象ではどの幹も蠟燭の様に眞直に立つてゐた。實際木を撰ぶとなるとどれも曲りくねつて見えた。出來る限り眞直なものを撰んだために比較的廣い面積に互つてしまつたことは、大工の手間を省くかはりに運搬を著しく困難にした。此の得失を考慮することは中々重要な問題である。密林である爲めに木の延伸は割合に良好で當日小柳氏が試みに切仆した三本の幹は左の數字を示してゐる。

番 號	胸 高	二 間	三 間	四 間	五 間
五十號	六寸	五寸	五寸	四、五寸	—
五十五號	七寸	六寸	五、七寸	五、四寸	五寸
三十二號	八寸	—	—	六寸	—

林野局にての計算では用材總數百四十一本、材積百三十石

薪材四十本、七棚八分となつて居る。

場所及び用材の問題は一先づ落着した。しかし時期はすでに暑中休暇に入り、學生はそれ〴〵歸省し、又は豫定の旅行計劃で忙しく、最初豫期したる學生の援助をまつことは不確實になつて來た。此間に於て植田君加茂君が終始ヒユツテの爲に我々と行動を共にすべく約束されたのと徳永君が七月二十日以後の助力を豫め申込まれたのだけが確實に豫期し得る助力者であつた。グブラー君も最初からの豫定通り休暇を利用して瑞西に歸省されたので、ヒンデル君と自分とが取残された。ヒンデル君は狀況が如何に變化しようともヒユツテは是非建てねばならぬとし一段の熱心を以て事に當られた。次に起る問題は誰に仕事を請負はすべきかであつたがこれは我々のかねてからの考へ通りに、漁の水本小判治を使用することゝした。水本は千歳川の上流から江別までの間では誰知らぬものなき丸木舟作りの名人で、ヘルヴェチアヒユツテの丸木の流しも彼の造船術の應用問題でのみ一丁で無難作に作つてしまつた彼の記念物である。水本を使へばかゝる仕事にあり勝ちの建築主對勞働者間の面倒な問題なしに最後まで愉快に仕事を繼續する

ことの信用を自分は彼に持つて居た。果して五十餘日に亘るヒユツテの仕事に雨や月光の洩るゝ半分倒置した造材小屋に起臥して少しの不平もなく忠實に仕事に従事してくれた。水本もヘルヴェチアヒユツテの功勞者の一人として感謝さるべき人物である。尤も獵師としての彼の本能に山小屋の建設が特別の感興をひいたのも事實で、重い荷の外にわざ〴〵ブローニング五連銃をかついで山に上つた。自分もヒンデル君もやはり銃を持つて行つたけれどもそれはキヤンプの「氣分」を飾るトロフィーとしてであつたが彼は無邪氣に余市岳の熊に昔ながらの憧憬を抱いて來たのであつた。

熊の見込みが無くなつて八月一日の瑞西國祭日の「餘興」にヒユツテの前で、持つて行つた實彈の射的會を催したときに彼と彼の愛兒の彈が美事に黒點に命中したときの彼はさながらウイルヘルム・テルの様に見えた。

實彈が盡きてから後にヒンデル君と熊とが出會した。双方幸に平和に物別れをしたさうである。

かくて準備も整ひ、福島高商のドクトル・ワーゼル君もかねてからの約束通りに手傳ひに來札されたのでいよ〴〵

七月二十日に我々の一行、水本等三人、植田、加茂人夫等の長い縦列が錢函の國境を越えて行つた。數日前よりの大雨に澤は春水よりも汎濫し春の架橋は第一の澤のものを残り、あとは跡形もなかつた。本流の架橋はヒユツテに關連して残された重要問題である。

七月二十日に山に登つた水本等は五十五日を奥手稻に暮して九月十三日に山を下りて來た。無論仕様書とプラン通りの仕事は一まづ完成してである。ヒユツテの構造を單簡に記すれば、心距三間と二間四尺、棟は三間の方を通つて居り、床は地上約四尺の高さとし床下を薪置場に當てゝある。地杭は桁材の端部、薪材のタモを用ゐた。用材はすべて白樺で床の一部に柳、机にタモ、流し、木舞板、扉、雨戸等はトドマツの餘りを使用した。壁材は丸太を井桁に組み上下面を落して五寸に揃へたものである。直通せるものは割に少なく土臺、窓下、棟木、母屋等に用ゐた。他は二本若くは三本繼ぎとし木栓を以て上下を固定した。壁の隙間は苔を集めて充填した。入口扉、窓の雨戸は屋根桁、木舞板と共に現場にて挽いて作つたものである。

屋根は全部二重葺きとし下層は三尺桁、表層は短かい桁

を使用し二層の間は充分なる空氣の層を隔てゝ居る。

入口の頑丈な扉を開いてまづ玄關といふべき一坪の場所に入り、こゝにスキー、杖、ビツケルを置き靴を脱いで二枚の引戸でへだてられた室内にはいる。大きなストーブと四隅の寢所との外にあまり充分な場所は残つて居らぬけれども互に秩序よく整頓することによつて我々には明日の登高に必要な安息を得ることを得るであらう。四隅の寢所は上下二段とし總べて十二人を收容する様になつて居る。正面には大きな流しがあり右には戸棚があつて書籍や救急材料、豫備食料等を收められ、左は床下に下りる口となつて居る。正面の窓は溪流に面して大きく、左右の窓は小さく小さいがその前には頑丈な机と腰掛とが作りつけられてある。吹雪に閉籠められた一日を靜思に送るも可、脾肉の嘆を腕角力に洩してもビクともせぬであらう。

前記のごとくヒユツテの床が高いから積雪中、小屋を掘出す様な心配は入らないと思ふ。萬一のために入口扉を上下二分したるは上部よりまづ入ることを可能にしたのである。ヒユツテの正面の棟木の斷面にはヒンデル君が彫刻した面白い顔が高く我々を見下して居る。何も意味はない

のなさうである。

さて我々の事業の第一は云ふまでもなく伐採と運搬であつたが前者は甚だ愉快な仕事であり後者はその反対であつた。我々は請負の一條件として是等の勞力の手傳ひを約束したのだけれども僅少の人数では重い白樺の長大な幹をどうすることも出来なかつた。一人でも二人でも學生の助力が欲しかつたけれども我々は下界とは暫くは交通を絶たれてしまつて、約束の徳永君も山で天候不良のために豫定の行動が取れなかつたために當分姿を見せず、遂に水本が二十二日に雨を冒して下山し三人の工夫をかり集めて來たので漸く差當りの材料だけを集めることが出來た。白樺の皮を剥ぐことも馬鹿に出来ぬ仕事であつた。要するに手傳ひの仕事はいくらでもあつた。長大の材はすべてロープで引張るより外に方法がなかつた。二十尺餘の最長材に到つては八人の力を以て蟻が物を運ぶが如くに漸く動かすことが出來た。五旬に亘る奥手稻のヒユツテの工事で、このザイルに取ついた仲間が一番ひどい目に遭つた。ドクトル・ワール、植田、加茂、後に徳永等の諸君は所謂「その歌が歌へる」仲間である。

昨年夏の天候に恵まれて小屋の仕事はわづか二日位しか全然休む日はなかつたに係らず仕事は中々捗らなかつた。

要するに材料がたゞつたのであつてプロンドの白樺は中々強情で尻が重くて曲りくねつて、大工を手古づらせる事が甚だしかつた。青木ならばと皆云つた。皆素直で身輕な黒いお松ちゃんを戀しがつた。全く最初の計畫通りに六寸七寸位の松丸太で仕事が出来たならば、恐らく工事の日數は半減し、仕上りも亦見違へる様であつたに違ひなかつた。

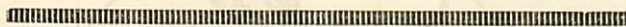
水本等三人では到底豫定の日數(二十一日!)に仕上がることは困難と見て、ヒンデル君は數日を経て後、錢函の大工田頭(でんがう)を雇つて工事完成まで働かすこととした。彼も忠實に仕事して最終日に一所に山を下つた仲間である。

以下次號

* * * * *

北海道庁観光課 青森県観光課 青森県立中央大学スキー部 青森県立中央大学スキー部

青 山 温 泉



北海の豊峰マツカリヌブリに
連亘するシリベシの山稜—
山稜を飾るタンネンホイメと
ブルフェルシユネ—
東洋のサンモリツツと
稱せらるる
理想的スキー地！

函館驛本線昆布一里半

札幌より一五時間

函館より一七時間

北海帝國大學キス一部及同岳部御用



登山靴とキス靴

各種

札幌市南一条十街

木本靴店



SKI HEIL

スキー

ト

全般

靴一キスと靴

角目丁四區郷本市

店靴屋

番二一七四小石川

番七二一六京東



靴ト一ケスと靴一キス

種 各 外

角目丁二西條二南市幌札

店 靴 ツ マ コ

番二九五話電

◆山とスキーの會は北海道帝國大學文武會スキー部の有志が、此の雜誌を發行する爲に作つてゐる會です。

◆スキーを研究せられる人、登山に興味を持たれる方が一人でも多くお読み下さることをお願いいたします。

◆山岳及びスキーに關して何なりとも御寄稿下されることをお願いします又印畫の御惠送を切望致します。原稿紙は御申越次第お送り致します。

◆原稿は、。を一字とし、行を更めるときは一字下けること。

◆記事中の數量は全て、C・G・S系によられん事を望みます。

◆雜誌代金に就て一應下記の諸項を御承知下さい。

◆本會より發する電略號を「ヤマ」として居ります。

◆前金切れの時の御知らせは最後の分の包装中に同封して御送りします。次の御送金あるまでは配本を見合せます。

定 價 金參拾錢

*前金御申込か、現金でなければお渡しいたしません。

*御送金はなるべく振替にてお願致します。

*六冊分前金拂込の方には送料を頂きません

*前金の切れた時の御知らせは最後の分の包装中に同封して御送りします。次の御送金あるまで配本を見合せます。

*本誌は營利的の刊行物ではありません。紹介、縁故の有無にかゝらず雜誌の代價は頂きます。

昭和二年十二月廿八日印刷
昭和三年一月一日發行

(毎月一回一日發行)

編輯者 井 出 英 次

印刷兼 發行者 小 川 玄 一

北海道札幌市北一條西二丁目

印刷所 札幌印刷株式會社

北海道札幌市北四條西十二丁目一番地
發行所 **山とスキーの會**

振替口座水樽八四九五番

La Gazeto
de la
Monta kaj Skia Clubo
No. 78. Januaro 1928. Sapporo, Japanujo.

美滿津特製
スキー用具と山の道具！
其他
アイス・ヤツト及びポツブスレー
アイス：スケート新荷着！



合名會社
美滿津商店

東京・本郷・赤門前

.....(切.....取.....線).....

東京本郷赤門前
美滿津商店御中

下記の所へ型録「秋より冬へ」郵送
せられたし。

姓名
住所

東京本郷赤門前
美滿津商店御中

下記の所へ型録「春より夏へ」郵送
せられたし。

姓名
住所

大正十二年七月二十七日第三種郵便物認可
昭和三年十二月二十八日印刷
昭和三年一月一日發行

山とスキー

第七十八號

定價金六拾錢